

研究報告

北海道の産科施設集約による 助産師業務についての研究 —集約した病院に勤務する助産師の意見—

北海道大学大学院保健科学院

佐々木壽子

北海道大学大学院保健科学研究院

林 佳子 良村 貞子 佐川 正

抄 録

北海道の産科施設集約における影響について、周辺の産科施設の閉鎖により集約化した施設に勤務する助産師を対象に意識調査を行った。産科施設集約によって助産師は仕事量の増加により身体的・精神的負担が増していることが明らかとなった。産科施設集約については、賛成が1名、どちらともいえないが20名、反対が11名であった。産科施設集約に関する意見のカテゴリー化により、「医療の安全性の低下」「業務の負担の増加」「妊産婦の不安・負担の増加」「医師との連携・信頼関係の不足」の4カテゴリーが抽出された。「医療の安全性の低下」を指摘した理由としては、スタッフ数の絶対的不足や、業務の多忙化、妊産婦のケアに充てられる時間の減少、緊急入院やハイリスク妊産婦の増加があげられていた。上述した問題点の解決法を見いだせることが、産科施設集約を成功させる鍵と考えられ、そのためには、集約した病院に勤務する助産師が主体的に意見を述べ、改善へ向けて参画することが必要と推察される。

キーワード：産科施設集約、助産師、分娩、業務、意識

I. 緒 言

近年、全国規模での産科医師数の不足が大きな社会問題となっている。とくに北海道においてはその傾向が顕著で、地方の多くの産科施設の閉鎖、縮小と、中核都市の産科施設への集約が進められている。地方中核都市の一部の産科施設は規模拡大、先端・高度医療を担うことが求められ、周産期センターとして総合的な母子医療を課せられてきた。その背景としては、全国平均を上回る速さでの産婦人科医師数の減少や、都市部偏在化が顕著であることがあげられ¹⁾、地域によってはハイリスク分娩のみならず正常分娩を行う産科医療を確保することが困難な状況となっている。

この産科施設集約（以後、集約とする）による

影響については、社会問題として、連日のように新聞・テレビなどのメディアで報道されているが、その内容は、産科医師不足や産科医療の特徴・負担についての研究や、あるいは妊産婦側からの報告や調査が多い。平成 19、20 年に、社団法人北海道看護協会によって道内の助産師有資格者を対象とした働く場の把握と意識に関する調査が行われているが^{2,3)}、現場で働く助産師の視点からの報告は今のところみられない。

そこで、集約によって助産師に課せられる役割・責任は増していると考えられることから、集約に伴う助産師への身体的、精神的影響やモチベーションに注目した調査が必要であると考えた。本研究では、周辺の産科施設の閉鎖によって分娩件